

学生の自己成長感を支えるために

－保育所実習Iの振り返りから－

ふく だ あつ こ
福 田 篤 子

〈要 旨〉

本研究では本学の2年次の必修科目である「保育所実習I・保育所実習指導I」の受講生を対象として、実習の現状把握と学生の自己成長感を支えるための授業のあり方について検証したものである。3年次前期の保育所実習事後指導Iの中で、実習について回答を求め分析を行った。

その結果、実習の実態としては、体調を崩す学生が半数に及ぶことや、睡眠時間6時間未満の学生が4割ほどいることが分かった。また責任実習は2歳児で行うことが多く、内容は絵本、手遊びの実施が7割を示すことが分かった。さらにその絵本や手遊びは授業の中で学んだことが活かされているということが分かった。最後に、学生は保育所実習Iにおいてはじめて行う責任実習に不安と緊張を強くもっているが、その反面実習に期待をしているということが分かった。また、不安や緊張の大きい、責任実習が終わると、頑張ったという達成感や、子どもの喜ぶ姿や、保育者からの評価や指導を通して、気持ちの中でプラス要因として認識するようになるということが見えてきた。

よって、保育所実習Iにおける責任実習は学生にとって負担が大きいが、その分自己成長を感じる要素として捉えられるといえ、事後指導の中で自己成長を学生自身が感じられるような取り組みをすることが必要といえる。

〈キーワード〉

保育所実習I、保育所実習指導I、保育者養成、自己成長感、成長し続ける保育者

I. はじめに

1. 現在の保育者養成課程に求められていること

平成24年-25年度の全国保育士養成協議会専門委員会では、保育者の専門性には成長プロセスがあること、それは段階を追って獲得していくものだという事、そして、経験とともに成長す

るものであると、養成校も保育現場もとらえていることを明らかにした。¹⁾つまり、保育者となったとき、1年目、5年目、10年目とそれぞれのキャリアによって求められる専門性は異なる。キャリアをつむとそれだけ求められる役割は高度かつ多様化していく。また社会状況の変化に応じて、知識や技術を新たに獲得していく必要がある。そういった状況の中で、保育者は、常に自らの専門性を高めるためには、保育者自身が学び続け、成長し続けていく姿勢が必要である。そして、その学び続け、成長し続けていく姿勢は、現場で初めて身に着けるものではなく、養成校の段階で取り組み、その素地を作っていく必要があることから、養成校でもその認識をもって、事後指導の内容を考えることが求められているのである。

そのため、本研究では学生自身が、実習を通して「成長した」という実感がもち、自ら保育を学び続け、成長し続けていく姿勢を確立していくための素地作りとなるような、事後指導について検討をしていきたい。

2. 「保育所実習I」の課題

本学において、保育所実習I・保育所実習指導Iを担当するようになって2年目である。実習中の巡回、実習後の事後面談等を通して、実習からの学びや実習に対する楽しさといった話を聞くことも多い。しかし、保育所実習に対して「日誌や、指導案を書いて実施する責任実習が大変である」や「責任実習をやりたくないから保育所実習に行きたくない」という声も聞かれる。成長するためには、困難なことを乗り越える経験も必要であるが、学生にとって大変だったことはマイナスイメージで印象に残っているようである。また、事後指導授業の中で実習の振り返りを行い次の実習に向けて新たな課題を見出していくと、実習で自分の出来なかったこと、指摘を受けたことに直面することとなり、今より成長したいという次にむけての意欲より、無難に終わらせたいという守りの姿勢が生まれてきているように感じていた。保育において振り返りを行い、そこを改善してより良い保育に繋げていくことはとても重要なことである。よって、学生が実習を振り返り、自分の保育を振り返る中で課題を見つけて次に向けて取り組むという過程は大切であるが、その中に自己成長感を感じる取り組みが不足していたのではないかと考える。

そこで、今まで学生の声を実感的に受け止めてきたが、データ化することにより、客観的に現状を把握し、学生の自己成長感を支えるための実習指導を検討していくこととする。

3. 本学の「実習・実習事後指導」の流れ

(1) 本学の实習概要

本学の学外実習は、保育士資格取得に必要な保育所実習と幼稚園教諭一種免許状取得に必要な教育実習を行っている。実習の連続性は、2年次の9月に幼稚園教育実習Iを1週間、2・3月の保育所実習Iを2週間、3年次の8・9月に施設実習Iを2週間、2・3月に保育所実習IIまたは、施設実習IIを2週間、4年次の6月に幼稚園教育実習IIを3週間である。その他実習に先立つ

体験として、1年次に附属園などで学外演習を行い子どもと触れ合う体験をしている。

(2)「保育所実習指導I」と「保育所実習I」の関係

保育所実習指導Iでは、学外実習に行くまでに「保育所実習事前指導I」として13回、学外実習後に「保育所実習事後指導I」を3回実施している。授業内容は、事前指導は学外実習に参加するにあたり必要な心構えや知識、技術の整理を行っている。また、事後指導は学外実習について振り返りを行い保育者としての今後の課題を見出す取り組みを中心に行っている。

(3)「保育所実習I・事後アンケート」と「振り返り曲線シート」について

実習事後指導の1回目の授業内で「保育所実習I・事後アンケート」図1を毎年行っている。その目的は、学生の実習状況を把握するためである。「振り返り曲線シート」図2は、今回初めて導入し、実習事後指導の2回目を実施した。その主な目的としては、実習を振り返る中で自分の感情と出来事を照らし合わせることにより、マイナス要因だけでなく、プラス要因にも着目し、自分の感情と出来事、学びのつながりを可視化できると考えたためである。

II. 研究目的と方法

1. 研究目的

本研究では、保育所実習、保育所実習指導の充実化を図るために、以下の2点について検証していくことを目的とする。

(1) 本学の保育所実習の現状把握

学生がどのような実習を経験してきたのかという現状をデータ化し客観的に示す。

(2) 実習指導内容の充実

成長し続ける保育者としての視点をもつために、実習のプラス要因に着目して自己成長感につながるような指導内容を検討していく。

2. 研究方法

(1) 研究対象

本研究では、「保育所実習指導I」の事後指導を受講している子ども未来学科3年生100名を対象として、授業の振り返りで使用した「保育所実習I・事後アンケート」と「振り返り曲線シート」100枚からデータの分析を行うこととした。

(2) データの収集時期

「保育所実習I・事後アンケート」と「振り返り曲線シート」は実習が終わった、前期の(2017年4月)に授業内で配布し回収した。「保育所実習I・事後アンケート」は事後指導の1回目、「振り返り曲線シート」は事後指導の2回目を実施した。

(3) 調査内容

「保育所実習I・事後アンケート」図1は、①体調に関すること2項目、②実習中の睡眠に関すること2項目、③責任実習に関すること5項目、④日誌に関すること1項目、⑤反省会に関すること2項目、⑥配属に関すること1項目、⑦大学での学びと実践に関すること2項目の7つの設問と15項目から成り立っている。このうち、本研究に関連する①体調に関すること、②実習中の睡眠に関すること、③責任実習に関すること、④日誌に関すること、⑦大学での学びと実践に関することを分析対象とする。

「振り返り曲線シート」図2は、横軸に実習を行った日を記入し、縦軸に実習での「気持ち」と「体調」の2軸について変化を曲線で示し、曲線に吹き出しを付けて、その時にあった出来事をプラス面とマイナス面に分けて具体的に示すものであり、久保田(2017)³⁾らが開発、具現化したものを使用した。その中で自己成長を感じられるよう、プラス要因に着目して分析を行うこととする。

2種類のアンケートは、実習園名、氏名ともに記名式になっている。しかし、今回はデータを分析するということを伝えており、記名を希望しない場合は、実習園名のみを記入し無記名も可とした。

(4) 倫理的配慮

学生には調査の目的、評価に反映されないこと、個人が特定されないように配慮することへの説明と周知を行った。

3. 分析方法

「保育所実習I・事後アンケート」で得られたデータは、項目ごとに量的に分析を実施した。自由記述の欄は、キーワードを抽出してデータ化を行った。

「振り返り曲線シート」は、KJ法を用いてデータの一部を取りし、サブカテゴリーとカテゴリーに分け命名した。分析を行っていくと、久保田(2017)²⁾が使用していた5つのカテゴリーが本研究においても妥当であると判断しそのまま使用した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 結果

(1)「保育所実習I・事後アンケート」より

①体調に関することでは、体調を崩した学生が47%、崩していない学生が53%であった。体調を崩した学生のうち欠席が28%、欠席しなかった学生が72%であった。体調を崩した人の病名や症状は、熱19%、風邪11%、喉15%、咳7%、鼻水7%の順であった。

②実習中の睡眠に関することでは、5時間以上6時間未満が25%と一番多く、次に6時間以上7時間未満が22%、7時間以上8時間未満が21%という結果であった。5時間未満の睡眠は全体の22%いた。中には睡眠をとれずに実習を行っている学生もいた。

③責任実習に関することでは、責任実習を行った日程は、始まって10日目19%、9日目が18%であり、実習後半に行われていることが多かった。責任実習を行った年齢は、2歳児クラスが一番多く25%であり、次いで4歳児クラス23%であった。しかし、幼児クラス(3歳・4歳・5歳児クラス)と乳児クラス(0歳・1歳・2歳児クラス)の比率では、幼児クラス60%、乳児クラス40%と幼児クラスでの責任実習を行っている学生のほうが多かった。責任実習の内容は、絵本41%、手遊び29%、製作16%、リズム2%、紙芝居2%、身体表現1%、体操0%、その他4%であった。その他の内容は、ペープサート、パネルシアター、エプロンシアター、パペット、朝の会であった。

④日誌に関する時間は、3時間以上4時間未満が35%、4時間以上5時間未満が21%、2時間以上3時間未満が19%、4時間以上が20%であった。一番時間がかかる学生で7時間以上という学生がいた。

⑤大学での学びと実践に関することでは、大学の学びが実習で役に立ったと感じた学生が80%、役に立たなかったと感じた学生が20%であった。また1年生の時に保育マインド実践講座で作った名札をそのまま実習で使っている学生が58%いた。

(2)「振り返り曲線シート」より

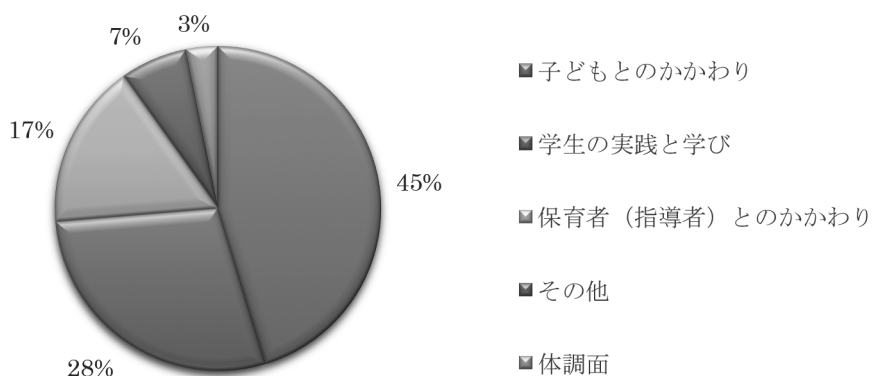
振り返りシート100枚のうち有効回答が91枚、無効回答9枚であった。データの一部が285個、サブカテゴリー23個、カテゴリー5個で分類した。

「振り返り曲線シート」からは、子どものかかわりが、一番プラスの要因に働くことが分かった(グラフ1)。その中でも子どもとの関係が構築され良い関係が保てた時にプラスに働いていた。また、子どもの存在そのものに可愛さを感じることもプラスに働くことが分かった(グラフ2)。その次に、学生の実践と学びに関することが、プラス要因となっている(グラフ3)。中でも責任実習に関する項目は多く、とにかく頑張ったという満足感、実際に上手くできたこと、思ったより落ち着いてできたことなどがあがっていた。取り組む姿勢としては慣れてきたことで、積極的に動けるように

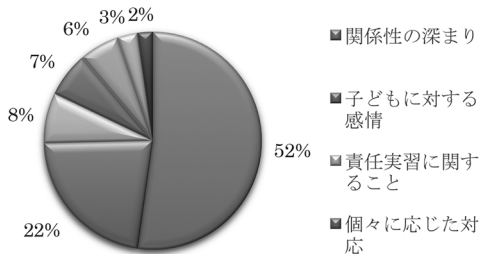
なった、楽しくなったという回答が見られた。実習の前半は不安と期待がいきりまじっているが、期待や楽しみが上回っているということが分かった。また、新たな学びや気づきがあることもプラスの要因になっていた。

保育者との関わりは3番目に多い項目であった(グラフ4)。保育者との関わりは、良い評価をもたらえたことがプラスに働いている。その他、指導や対応が丁寧だったことが実習のモチベーションの上がる要因となっていると言う事が分かった。

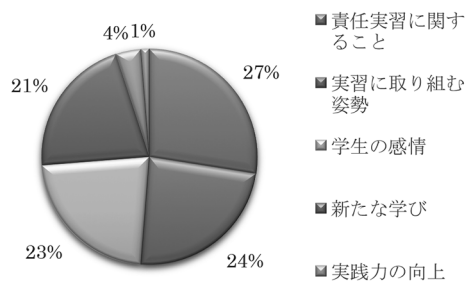
体調面では、体調が回復したことによって気持ちがプラスに働いたという回答のみであった。その他休日前や、実習の最終日は頑張ろうという気持ちになるということであった。(グラフ5)



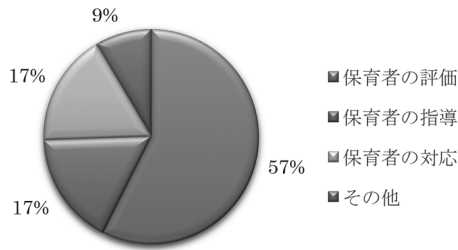
グラフ1 学生の気持ちがプラスになる要因



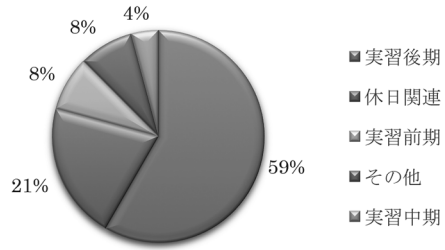
グラフ2 子どもとのかかわりでプラスに働く要因



グラフ3 学生の学びと実践がプラスに働く要因



グラフ 4 保育者とのかわり度でプラスに働く要因



グラフ 5 その他でプラスに働く要因

2. 考察

①体調に関することでは体調を崩す学生が多く欠席者も多いと感じていたが、約半数が体調を崩していることが分かった。しかし、体調を崩しても約7割が休まず無理をして実習を行っていることが分かった。実習は継続して行くことが大事であるということ、欠席をした場合実習を延長しなければならないということが、休まず無理に実習を継続している理由にあげられる。しかし、本当に休まなければならない状態なのか、実習を継続できる状態なのかを見極めること、その判断を的確にすることの重要性についても説明していく必要であるといえる。時期的に、インフルエンザや風邪がはやるが、一番は普段より大きい声をだすこと、保育中は普段と違う声の出し方をするがなれていないことから、喉を痛めることが多く見受けられた。責任実習の日程を変更してもらうなど実習先にも迷惑を掛けていること、実習園からの評価でもマイナスの評価となることから、声の出し方、喉のケアについても指導していく必要がある。

②実習中の睡眠に関することでは、睡眠不足は、実習中の居眠り、表情が暗い、元気がない、判断力が鈍るなど、実習そのものへ悪影響がある。睡眠時間に関しては実習日誌の記入時間と関連がある。中には日誌に時間がかかり、睡眠を一切取れていない学生もいた。こういった日誌の負担を配慮し、本年度より実習日誌の記録用紙を変更した。この変更により、今後の学生の日誌の時間と睡眠時間が変化するか追いかけていきたい。

③責任実習に関することでは、責任実習を行った日程は、実習後半に行われていることが多かった。実習に慣れてからの責任実習ということで園が配慮してくれていることが見て取れる。授業内では、指導案の指導を4歳児クラスの製作で指導しているが、年齢別でみると2歳児が多く2歳児でも指導案の指導を検討していく必要がある。内容では、絵本、手遊び、製作で9割弱をしめ、狭い分野に限られている。学生が他の分野も責任実習で取り組めるよう、授業の中で他分野も積極的に紹介していきたい。

④大学での学びと実践に関することでは、大学の学びが実習で役に立ったと感じた学生が80%、役に立たなかったと感じた学生が20%であった。その内容は手遊びや絵本といった、保育技術に関するものが多かった。子ども理解、心理学、子どもの保健、栄養といった理論的な大学での学びと、実際の子どもの姿を統合して捉えることは難しかったようである。理論と実践の統合

に気が付く取り組みを行うことが今後の課題の一つと言える。

⑤「振り返り曲線シート」の結果は、久保田(2017)と同様の結果であり、本校だけの特徴ではないと言える。実習生は子どもとの関わり、特に関係がうまく構築できたときに実習の気持ちがプラスに働くといいことが分かった。そして、責任実習に対して不安であるという意見が多く見受けられたにも関わらず、子どもとの関わりで子どもが喜んでくれた時、学生の実践と学びに関することで、責任実習を頑張った時、保育者との関わりでも、保育者からの評価が良かった時と、責任実習を実施したことがプラス要因になるということが見えてきた。また、不安もあるが、実習そのものへの期待も大きいことも分かった。

Ⅳ. まとめ

1. まとめ

本研究を通して、見えていなかった学生の姿を少し見ることが出来たといえるだろう。学生は不安もあるが、期待もしていて、その不安を消してくれる一番大きい要素が、子どもとの関わりの中で子ども関係が構築できたときであること。また、保育者とのかかわりで褒めてもらうという経験や、指導をしてもらうこと、さらに自分の中で新しい学びを得るといことも学生の自己成長を促すということが分かった。さらに、一番緊張と不安の要素である責任実習を終えた時に自分の中でも成し遂げたという達成感が見られ、さらに自分の頑張ったことに対して、喜んでくれる子どもがいて、認めてくれる保育者がいる。そこに、自己成長を感じる事が出来るようだ。よって「責任実習をしたくない」とか「責任実習は大変」という認識だけではなく、責任実習に取り組んだ先にあるプラス面である喜びや、新たな学びや自己成長感を感じる取り組みを行うことが重要であるといえる。

2. 今後の課題

今回、データの種類を多く取りすぎ分析が散漫になってしまったと感じる。設問の中には因果関係を検討したほうが明確になるものも存在しており、分析方法を検討していく必要がある。また、「振り返り曲線シート」のマイナス面を考慮しなかったため、今後の研究ではプラス面とマイナス面の関係も合わせて検討していきたい。

H28 保育所実習 I ・事後アンケート

2017/04/17 (月)・04/19 (水)

保育所実習指導教員

★初めての保育所実習、大変お疲れ様でした。今後の参考にしたいと思いますので、実習園について、下記の質問にお答えください。(当てはまるところを○で囲み、記入する) なお、記入内容は、成績には関係しません。

1. 厳冬でしたが、実習中に体調を崩しましたか。 はい (欠勤した・ 欠勤はせず) ・ いいえ
はいと答えた方は具体的に病名や症状 ()
2. 1年次に制作した名札を使いましたか。 はい ・ いいえ (園指定の名札 ・ 新たに制作)
3. 早番(早朝保育)、遅番(延長保育)を経験できましたか。 はい ・ いいえ ・ ____番のみ経験
4. 反省会(もしくは話をする時間)は、毎日ありましたか。 はい ・ いいえ (全くなし・ 数回あり)
5. 指導案を立案しての部分実習は、何日目に何歳児で行いましたか? _____日目・ _____歳児
6. 指導案を立案しての部分実習はどのような分野でどのような内容で行いましたか。
分野: 製作、リズム・体操、ゲーム、絵本、手遊び、その他 ()
内容: _____
7. 指導案を立案しない部分実習もふくめ全部で何を何回行いましたか。 合計 _____回
製作 _____回 リズム・体操 _____回 ゲーム _____回 絵本 _____回 手遊び _____回 その他 _____回
8. 実習中、大学での学びが役に立ったと思うことはありましたか。具体的にどのような内容ですか。
はい ・ いいえ 内容 ()
9. 実習のまとめの反省会がありましたか。 はい (担当保育士と ・ 園長先生ほかも同席) ・ いいえ
10. 日誌に要する時間は何時間くらいでしたか。 _____時間
11. 実習中、何時くらいに就寝し、何時間くらいの睡眠時間でしたか。
就寝時間 _____時 ・ 睡眠時間 _____時間
12. 実習園の実習生指導はどうでしたか。または、実習全体についてどう感じましたか。
.....
.....
.....

実習園:	保育園	番号	氏名
------	-----	----	----

図1 保育所実習 I ・事後アンケート

保育実習・教育実習「振り返り曲線シート」記入例		実習期間	
実習園名	学籍番号	年 月 日()	年 月 日()
自信をもったこと、そしてさらに向上させたい点(省察的課題＝自分の自信を究めよう)			
吹き出しでコメントを記入			
<p>絵本を借りたり、手遊びのレパートリーを増やして、準備はできた。不安もあるけど、楽しみ。</p> <p>保育者と子どもの関わりを見て、たくさん発見する。</p> <p>自分なりに子どもと関わる。声掛けを工夫できた。日誌の書き方をほめられた。</p> <p>体調も回復！子どもとたくさん遊ぶ。</p> <p>部分実習。一生懸命頑張った。</p>			
テーマ(縦軸) 実習日			
私の実習曲線			
吹き出しでコメントを記入			
<p>わからないことばかりで、思っていた以上に緊張してしまう。</p> <p>疲れが出てきて体調を崩す。モチベーションも下がる。(病院へ！)</p> <p>子どもとの関わる際の声掛けの難しさを目の当たりにする。保育者の動きや発言、意図を注意深く観察する必要がある。</p> <p>部分実習。年齢に合わせた活動内容の難しさを思い知った。その場の対応が臨機応変に出来ず、反省した。</p>			
自己課題・今後の学びが必要なこと(省察的課題＝自分の課題を見つめ、具体策を考えよう)			

右の記入例を参考に①から⑨の順に記入しましょう。

① まずは実習期間を記入する。

② 実習園名(法人名から正しく記入し)、学籍番号、氏名を記入する。

③ 吹き出し上に記載した出来事は、
・保育者を目指す者としての自信につながるもの
・自分の長所(思いがけず発見することもある)
・次の実習に向けての励みとなる。
これらのことを発展的課題として明確に捉えて、箇条書きに記し、さらに磨きをかけるためにどのような取り組みをしていくかを具体的に記す。

④ 曲線のトップから吹き出しを書き、その中にその時にあった出来事を具体的に記す。
例・ほめられたこと
・子どもとの関係で手ごたえがあったこと
・うれしかったこと
・上手いかったこと
などを思い出し具体的に記入する。

⑤ 実習した日(土日を含めた期間内全て・欠席日も含む)を記入する。

⑥ <テーマ設定> 自分の実習を振り返り、実習曲線グラフの縦軸のテーマを考える。
モチベーション、やる気、意欲、積極性など

⑦ <曲線グラフを書く> 自分の縦軸テーマに沿って、その様子読みをフリーハンドで表現する。
自分のテーマに沿った曲線を赤ペンで(心・気持ち) 縦軸面・体調は黒線で描きましょう。(印刷の都合上、記入例では赤線は点線で示してあります。)

⑧ 曲線のダウントップから吹き出しを書き、その中にその時にあった出来事を具体的に記す。
例・注意を受けたこと
・子どもとの関係で手ごたえが感じなくなった
・しんどく、苦しいと思ったこと
・上手いかなかったこと
などを思い出し具体的に記入する。

⑨ 吹き出し上に記載した出来事は、
・保育者を目指す者としての今後の学習課題
・これまでの生き方(生活習慣・マナー・コミュニケーション・生活感覚)の改善
・次の実習に向けての具体的な準備である。
これらのことを省察的課題として明確に捉えて、箇条書きに記し、改善するためにどのような取り組みをしていくのか、自己課題を記す。
その際、「〇月までに△△△を達成」といった目標設定を明確に示すと尚良い。

図 2「振り返り曲線シート」

〈引用文献〉

- 1) 一般社団法人全国保育士養成協議会専門委員会：平成 27 年度専門委員会課題研究報告書「学生の自己成長感を保障する保育実習のあり方Ⅱ－ヒアリングからの検討 -」, 2016. P139
- 2) 久保田美沙子, 松山洋平：実習事後指導における学生の学びの可視化に関する一考察—保育実習Ⅰ・幼稚園教育実習での振り返り曲線シートから—, 和泉短期大学研究紀要, 37, P45-51, 2017.

〈参考文献〉

一般社団法人全国保育士養成協議会専門委員会：平成 27 年度専門委員会課題研究報告書「学生の自己成長感を保障する保育実習のあり方Ⅱ－ヒアリングからの検討 -」, 2016.

田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科：保育所実習Ⅰ・Ⅱ実習の手引き, 2017,